

## フランス語における動詞語幹の交替について

### Alternance radicale du français

矢島 猷三

Yuzo YAJIMA

フランス語動詞の現在語幹の交替は、俗ラテン語の語幹交替以来、徐々に形成されてきたものである。そしてこの現象は、それを取り巻く周囲の多くの言語現象と密接な関連をもっているが、中でもアナロジーとの関わりは大きい。そもそも同じパラディグムの中に異なった種類の語幹の並存することが、全体を均質化しようとする類推化の働きの始まりである。本論ではこの類推作用を視野の中に収めながら、語幹交替の考察を進めてゆくこととしたい。語幹の交替を歴史的に考察するための中心の要素は、一つは語幹母音、もう一つは語幹末子音である。語幹母音は人称の別によるアクセントの有無によって二重母音化の有る無しとの区別を生じ、これが音色の相異を生み出す。即ち、母音の交替である（開音節で  $\hat{e} > i\hat{e}$ ,  $\hat{e} > \acute{e}$ ;  $\hat{o} > u\hat{o}$ ,  $\hat{o} > \acute{o}$ ;  $a > ai$ ,  $a > a$ ;  $\acute{e} > \acute{e}i$ ,  $\acute{e} > \acute{e}$ ;  $\acute{o} > \acute{o}u$ ,  $\acute{o} > \acute{o}$ ）。一方語幹末子音は一方では語幹母音の二重母音化に対して、開音節を形成するか — この場合、語幹末子音は母音間の位置を占める — または閉音節を形成するか — この場合、子音は他の子音と共存して子音群を作っている — の点で大きく関与するが、また同時に、先行の語幹母音、および後続の活用語尾の母音、子音の影響で、様々な形を取ることになる。語幹末子音が人称に応じて種々に姿を変える様を、「子音の交替」と称してよいかもしれない。しかし子音が交替するのは語源段階だけで、時代と共に母音的要素も現われるところから、またこの交替に何らかの文法的機能が裏づけられているとはいえないので、この表現の使用は慎重を要するであろう。「語幹末音の交替」とするのが適当であろう。いずれにしても語幹母音および語幹末子音は、互いに影響し合いながらも、それぞれが音声変化の原理に従って一定の結果を生じることになる。そして双方の結果の総和が、全体として語幹の変容をもたらすものであることは言うまでもない。

ところで、現在までこの語幹の交替が研究史の中でどのように扱われてきたかといえ、全体の交替ではなく、語幹母音の交替ばかりが対象とされてきたと言わざるをえない。P. Fouché は佛語動詞形態に関するその大著の中で、母音の交替については音声発展形、類推形をも含め、詳細を盡くして分析しているが、語幹全体の交替という見方はとっていない。語幹末子音については、その変化は詳述しているものの、交替を述べているものではない。最近刊行された幾つかの著作についても、傾向は同様である。従って本論では、現在まで無視されてきた観のある語幹末音の交替に焦点をあて、そこから語幹全体の交替へアプローチすることとしたい。例に示された動詞形は proto-français (5世紀末～9世紀)の終り頃、即ち9世紀頃の推定形である。これはこの時期が文証フランス語の誕生期という意味で重要であることの他、同時に後の時代の、特にアナロジーによる語幹の変貌を俯瞰できる位置にあるからである。従って例示されている語形は、仏語音声史の上での

鼻母音化、破擦音の摩擦音化、二重母音の発展(û>û, éi>éi, óu>óu)などは含んでいない。またこれらはいわば純粋な音声発展形を想定したものである。仮にこの時期に至るまでの間に類推による置き換えが生じたとされるものがあつたとしても、それははじめから再検討し直すためである。もっとも出発段階の俗ラテン語期に、すでに類推作用が及んでいると一般的に認められているものについては、それを採用している。3 b 活用の第4活用への融合、6人称(=3人称複数)語尾 iunt → unt, 合成語におけるアクセントの移動などである。また第3活用動詞の4・5人称(=1・2人称複数)はすでにアクセントが語尾へ移り、proparoxyton が paroxyton 化したものとして取り扱った。

今俗ラテン語段階での語幹末子音がどのような音声上の前後関係にあるかを模式的に考えてみると、語幹母音のうしろに位置する語幹末子音 c は、第1活用では、c<sup>o</sup>, c<sup>a</sup>, 第2活用では c<sup>o</sup>, c<sup>e</sup>, 第3活用では c<sup>o</sup>, c<sup>i</sup>, c<sup>u</sup>, 第4活用は c<sup>o</sup>, c<sup>i</sup>, c<sup>u</sup> となる。これによって判るように語幹末子音は母音間にあり、そして後続する母音は a, e, i, o, u すべての可能性があることになる。さらに yod の後続する場合もある。以上のことから、子音群を形成している場合は別として、この位置の子音には有声音化と摩擦音化、そして口蓋化の可能性が高いことが判るであろう。事実、この3種の変化が語幹末音の交替に果す役割は大きい。

上記の音環境に位置する語幹末子音は、それぞれの音声変化を経て新たな交替を生み出すことになるが、音声変化の結果ないしは途中経過から見て、特徴的と思われるものを以下に示すこととする。

まず子音が消失してゼロになる場合がある。いずれも母音間に位置する場合で、-b<sup>o</sup> → ゼロ (SCRIBO>ekri), -w<sup>o</sup> → ゼロ (VIVO>wi), -t → ゼロ (OBLITAT>óbliet), -d → ゼロ (LAUDAT>lòet), -k<sup>o</sup> → ゼロ (DICO>di; FACUNT>faunt), -g<sup>o</sup> → ゼロ (TRAGO>trao; TRAGUNT>traunt)にその例を見ることができる。一部の人称のみ生ずる場合が多いが、中には OBLITARE, LAUDARE のようにすべての人称で同じ変化が生じているものもある。

次は子音ならぬ二重母音の副次的要素 i を生じる場合である。母音と結合して ai, oi などを作る。この音の語源は、口蓋化の結果生じた yy が主なものである (yy>yi)。即ち、母音間の dy>yy (AUDIO>audyo>auyyo>òi), gy>yy (FUGIO>fugyo>fuyyo>fùi), 母音間の -g<sup>o</sup> → yy (TRAGIS>trayyis>trais), ks>ys (LAKSO>lays>làis)。また、PLANGIT>plaint の i は、ng<sup>o</sup> → g がその後 implosif になるところから生じたわたり音である。この i は APPODIARE のように、すべての人称に見られる場合もある (apùi-, apoi-)。同じく二重母音の副次的要素の y を生じる場合がある。母音と結合して ay, ey などとなる。この音の起源は l"dur"(i) にあり、v+l+c の位置にある l が“母音化”(vocalisation)することによって出現する。FALLIS>fàis>fas, VALES>veis>ves にその例を見る。

元来の成り立ちは上記と同じ y>i であっても、語幹内の母音と融合して母音 i となっているものがある。LĒGIT>lit の i は、è の二重母音化による iè と -g<sup>i</sup> からの i が三重母音 ièi を形成し、それが一つの i にまとまったものである。CASTIGAS>èastigs では語幹の母音 i に g<sup>o</sup> から生じた y>i が吸収されており、CADIO>kadyo が èi となるのは、Bartsch の法則によって生じた iè

と母音間の dy からの i が一つに混じり合う、即ち  $\hat{e}i\acute{e}yo > \hat{e}i\acute{e}i > \hat{e}i$  の経過を経るからであり、さらに  $SEDEO > s\acute{e}dyo > si$  は、diphthongaison conditionnée による  $si\acute{e}$  と  $i(<y<-dy-)$  が一つにまとまった結果である。同じように  $TEKSIT > t\acute{e}yset$  は、 $ti\acute{e}yset > tist$  となって、 $ti\acute{e}$  と ks 起源の  $i\acute{s}$  が融け合っている。 $TENEO > t\acute{e}nyo > ti\acute{n}$  も途中で diphthongaison conditionnée が関っており、この場合は  $implosif$  の  $i\acute{n}$  が融合している。

子音が融合を生じている場合もある。これは 2 人称単数の語尾 s および 3 人称単数の語尾 t の前の母音が消失する結果、語幹末子音とこれらが一つになってしまうものである。この際には語末子音のみを取り出すことは不可能になる。 $HATIS > \acute{e}s$ ,  $HATIT > \acute{e}t$  では  $\acute{s}$  と t の中に両者が一体となっている。 $SENTIS > sen\acute{s}$ ,  $SENTIT > sent$ ;  $PARTIS > par\acute{s}$ ,  $PARTIT > part$  も同じである。また  $DORMIS > dor\acute{s}$  では  $rms > rns > rnds > r\acute{s}$  の経過が推定できるので、これも  $\acute{s}$  の中に語幹と語尾が一体化しているとしてよいであろう。

無変化であった語幹末子音が、語尾の母音の消失によって語末に位置するか、または語尾の子音と直接接することによって無声の性質を帯びることがある。 $RESPONDO > r\acute{e}spont$ ,  $ADCAPO > a\acute{c}ief$ ,  $SERVIT > serft$ ,  $D\acute{E}BET > d\acute{e}ibet > deift$ ,  $ROMPIT > ronft$  に見る変化はこの結果である。また鼻子音 m はこの位置では n に変わるので、 $G\acute{E}MO$ ,  $G\acute{E}MIS$  は  $jien$ ,  $jiens$  となる。

語幹末子音に現れる破擦音は、いずれも子音の口蓋化によって生じたものである。この音の出現の時期は様々であるが、それぞれが過去の口蓋化の名残を引きずっていることになる。 $HATIO > hatyo > ai\acute{s}$  は母音間の  $-ty->i\acute{s}$  によるものであり、 $SENTIO > sentyo > sen\acute{s}$  は支え子音 (consonne appuyée) のうしろに生じた  $ty > \acute{s}$  の変化である。同一の動詞でも  $PLACEO > plakyō > pla\acute{s}$  は  $ky > \acute{s}$  の口蓋化であり、 $PLACET > plai\acute{s}et > plai\acute{s}t$  は母音間の  $-k^{\cdot}i > i\acute{s}$  に起因している。 $COLLOCAT > kolcat > kol\acute{c}et$  の  $\acute{c}$  は  $k^{\cdot}appui\acute{e} > \acute{c}$  に他ならない。また、 $SAPIO > sapyō > sa\acute{c}e$ ,  $CAMBIO > kambyō > \acute{c}anj\acute{e}$ ,  $SERVIO > servyō > serj\acute{e}$ ,  $DORMIO > dormyō > dorj\acute{e}$  はそれぞれ  $py > p\acute{c} > \acute{c}$ ,  $by > bj > j$ ,  $vy > vj > j$ ,  $my > nj > j$  の変化に由来する。 $NASKIS > nai\acute{s}es$ ,  $CR\acute{E}SKIS > cr\acute{e}i\acute{s}es$  などにおける  $i\acute{s}$  は  $sk^{\cdot}$ , 即ち appuyé に位置する  $k^{\cdot}i > i\acute{s}$  の結果である。この変化は先行する s までも半口蓋音にしてしまうのでわたりの音 i が伴うことになる ( $sk^{\cdot}i > i\acute{s}\acute{s} > i\acute{s}$ )。  $V\acute{E}NKIT > v\acute{e}in\acute{s}et$  も同様の原理によるものと理解してよいであろう ( $nk^{\cdot}i > i\acute{n}\acute{s} > i\acute{n}\acute{s}$ )。以上の破擦音は、 $CAMBIARE > kambyare > \acute{c}anj-$  のように全ての人称に現われる場合がある。口蓋化を生む音の組み合わせが、語尾との結びつきから生ずるのではなく、語幹の内部にすでに存在しているからである。同一のケースであっても  $PRETIARE > pr\acute{e}tyare$  の語幹末子音に  $\acute{s}$  ( $pri\acute{s}$ ) と  $\acute{z}$  ( $pri\acute{z}e\acute{s}$ ) の相異が生じるのは、一旦全ての人称に生じた有声破擦音の  $\acute{z}$  が、一人称単数では語末に位置するために無声化するからである。

以上の特徴的な幾つかの音声変化、およびその他各種の音声変化の結果、語源の語幹末子音は、protofrançais 末期の段階で、4 種類の交替に達していることになる。交替の無いもの、即ちこの段階に現われる語幹末の音が 1 種であるもの、交替が 1 回のもの、即ち語幹末の音に 2 種類が見られるもの、交替が 2 回で語幹末音 3 種、そして交替 3 回で語幹末音 4 種のものである。交替の無いものとは、6 つの人称のすべてで同一の語幹末音が生じているもののものであるが、この種の現われ方をする音としては流音 l, r, 鼻子音 m, n, 口蓋化の結果である  $\acute{c}$ ,  $nj$ ,  $i\acute{s}$ ,  $i$  をあげることが

できる。さらにゼロ、即ち語源の語幹末子音がすべて消失している場合にもこのようなケースがある。交替が1回のもは数の上では最も多くを占める。これには無声・有声の対立しているもの：  
 f~v, s~z, yf~yv, nt~nd, rt~rd, 閉鎖と摩擦のペア：mp~mf, 鼻子音同士：m~n, 一方にゼロを持つもの：ゼロ~v, ゼロ~d, ゼロ~i, i~ゼロ, i~ゼロ, 破擦音が生じているもの：t~s, s~t, ns~nt, rs~rt, ss~st, s~z, nk~inš, sk~iš, lk~lê, rk~rš がある。また diphthongaison conditionnée の有無によって is~is, vocalisation の有無から l~y が生じており, ir~r, iq~n は palatalisation の有無が関与する。交替が2回のもは、次のように分類することができよう。ゼロを持つもの：ゼロ~f~v, ゼロ~i~i, 破擦音を持つもの：nt~ns~nd, rt~rs~rd, j~f~v, ê~f~v, ゼロと破擦音を持つもの：ゼロ~s~t, s~t~ゼロ, ゼロ~s~z。ほかに palatalisation と vocalisation が混在するもの：l~y~l があり、また口蓋音と無声、有声の対立が同時に見られるものもある：k~i~g。交替が3回のもは次の如くである：i~s~t~ゼロ, i~s~t~ゼロ, s~i~s~i~z~ゼロ, rj~rs~rt~rm, nk~int~g~ng。

以上に示したような語幹末音の交替の上に立って、直説法現在の語幹全体の交替はどのように行われているのであろうか。またそれは、どのように記述すればよいのであろうか。実際の語幹の交替は語幹末音の交替に母音の交替を組み合わせたものとなるので、非常に複雑な様相を呈するはずである。またその分類、整理の方法も様々な可能性があろう。語幹末音の交替を基準にするもの、母音交替の見地に立つもの、また活用のタイプに基づくものなど、種々のものが予想される。本論では語幹の交替とアナロジーの関わりを求める立場から、同一動詞の中の人称による語幹形の異同に焦点を置くこととしたい。即ち、どの人称とどの人称が同じか、または異なっているかを確かめると共に、どのような群分けの種類があるのかを整理する。その結果は、protofrançais 以後の類推作用の動きを知るための出発点として役に立つことになろう。我々の分類では、便宜上1人称単数が独立しているもの、他の人称の1つと共通のもの、他の人称の2つと共通のもの、というように大筋を分け、更にその先に下位区分を設けることとした。扱った動詞形は今までに分析できたもののみを示している。

1~2~3~4~5~6型：MANDARE(mant~mand), COLLOCARE(kolk~kolê), PŌNERE(pōun~pōn), \*WARDARE(gart~gard)。1~2~3~4~5~6型：COLLIGERE(kolk~kolj~kolg)。1~2~3~6~4~5型：\*ADCAPARE(êi~ef~êiev~êév), PROBARE(pruō~pruōv~prōv), TROPARE(truōf~truōv~trōv), TENERE(tin~tièn~tén), VENIRE(vi~vièn~vén), \*MORIRE(mu~r~muōr~mōr), PĒ(N)SARE(péi~s~péiz~péz), PRETIARE(pri~s~pri~z~preiz), NEGARE(ni~ni~nei)。1~2~3~4~5~6型：PLACERE(pla~s~plai~s~plai~z), TACERE(ta~s~tai~s~tai~z), SCRIBERE(ekri~ekrif~ekriv), VIVERE(vi~vif~viv), SERVIRE(sérj~sérif~sériv), \*FALLIRE(faj~faj~fal), BULLIRE(bó~bóv~ból)。1~2~3~4~5~6型：DĒBERE(déj~déj~f~dév~déiv), MOVERE(mó~j~muōf~móv~muōv), \*SAPERE(sa~é~séf~sav~sév), BIBERE(béi~béi~f~bév~béiv), VOLERE(vuō~l~vuōv~vól~vuól), VALERE(val~vév~val~vév), SALIRE(sal~seu~sal~sel), FACERE(fa~s~fai~s~fai~z~fa), PLANGERE(plank~plain~plañ~plang)。1~2~3~4~5~6型：GAUDERE(jōi~jōs~jōt~jō), AUDIRE(ōi~ōs~ōt~ō), DORMIRE(dōrj~dōrs~dōrt~dōrm)。1~2~3~4~5~6型：\*HATIRE(ai~s~és~ét~a~é), \*CADERE(êi~êi~s~êiet~êé~êie), SEDERE(si~si~s~siét~sé~sié)。

1.2~3.4.5.6型: SORTIRE(sor $\bar{s}$ ~sort), PARTIRE(par $\bar{s}$ ~part), SENTIRE(sen $\bar{s}$ ~sent), \*MENTIRE(men $\bar{s}$ ~ment). 1.3~2~4.5.6型: PRENDERE(pre $\bar{n}$ t~pren $\bar{s}$ ~prend), PESPONDERE(respon $\bar{t}$ ~respon $\bar{s}$ ~respond), PERDERE(per $\bar{t}$ ~per $\bar{s}$ ~perd). 1.6~2.3.4.5型: COGNOSCERE(kon $\bar{o}$ sk~kon $\bar{o}$ i $\bar{s}$ ), LEGERE(li $\bar{e}$ ~li), \*DESTRŪGERE(destr $\bar{u}$ ~destr $\bar{u}$ i), \*FINISCERE(fin $\bar{i}$ sk~fini $\bar{s}$ ), PASCERE(pask~pai $\bar{s}$ ), CRĒSKERE(kr $\bar{e}$ sk~kr $\bar{e}$ i $\bar{s}$ ), PARĒSCERE(par $\bar{e}$ sk~par $\bar{e}$ i $\bar{s}$ ), NASCERE(nask~nai $\bar{s}$ ), \*TORKERE(tork~tor $\bar{s}$ ), VINCERE(v $\bar{e}$ nk~v $\bar{e}$ i $\bar{n}$ s), \*TRAGERE(tra $\bar{u}$ ~tra $\bar{i}$ ). 1.6~2.3~4.5型: CONDOCERE(-d $\bar{u}$ ~d $\bar{u}$ i $\bar{s}$ ~d $\bar{u}$ i $\bar{z}$ ), MOLERE(mu $\bar{o}$ l~m $\bar{o}$ u~m $\bar{o}$ l), DICERE(di~di $\bar{s}$ ~di $\bar{z}$ ). 1.6~2~3~4.5型: CRĒDERE(cr $\bar{e}$ i~cr $\bar{e}$ i $\bar{s}$ ~cr $\bar{e}$ i $\bar{t}$ ~cr $\bar{e}$ ), VIDERE(v $\bar{e}$ i~v $\bar{e}$ i $\bar{s}$ ~v $\bar{e}$ i $\bar{t}$ ~v $\bar{e}$ ).

1.2.3~4.5.6型: VESTIRE(vess~vest), ABSOLVERE(-s $\bar{o}$ u $\bar{f}$ ~s $\bar{o}$ u $\bar{v}$ ). 1.2.3~4.5~6型: \*FUGIRE(f $\bar{u}$ i~f $\bar{o}$ i~f $\bar{o}$ u), GEMERE(j $\bar{i}$ en~j $\bar{i}$ em~j $\bar{i}$ em), \*CREMERE(kri $\bar{e}$ n~kr $\bar{e}$ m~kri $\bar{e}$ m), RECIPERE(re $\bar{s}$ i $\bar{f}$ ~re $\bar{s}$ iv~re $\bar{s}$ iv).

1.2.3.6~4.5型: TEXERE(tis~t $\bar{e}$ s), ADIUTARE(ayu~a $\bar{i}$ d), AMARE(a $\bar{i}$ m~am), PLĒRARE(pl $\bar{o}$ ur~pl $\bar{o}$ r), \*DEMORARE(-mu $\bar{o}$ r~m $\bar{o}$ r), QUERERE(kwi $\bar{e}$ r~kw $\bar{e}$ r), \*PARAULARE(par $\bar{o}$ l~par $\bar{l}$ ), APPODIARE(ap $\bar{u}$ i~ap $\bar{o}$ i), INODIARE( $\bar{e}$ n $\bar{u}$ i~ $\bar{e}$ n $\bar{o}$ i). 1.4.5.6~2.3型: RUMPERE(romp~ronf). 1.4.5.6~2~3型: CLAUDERE(cl $\bar{o}$ ~cl $\bar{o}$ s~cl $\bar{o}$ t), \*RIDERE(ri~ri $\bar{s}$ ~rit).

1.3.4.5.6~2型: MITTERE(m $\bar{e}$ t~m $\bar{e}$ s). 1.2.3.4.5.6型: CAMBIARE( $\bar{e}$ an $\bar{j}$ ), APPROPIARE(apr $\bar{o}$ ê), LAXARE(la $\bar{i}$ s), TORNARE(t $\bar{o}$ rn), \*OBLITARE( $\bar{o}$ bli), LAUDARE(l $\bar{o}$ ), CASTIGARE( $\bar{e}$ asti $\bar{i}$ ).

[付記] 本稿は日本ロマンス語学会第31回大会(1993年5月, 学習院大学)における口頭発表に基づくものである。

## BIBLIOGRAPHIE

- Bonnard, H. : Synopsis de phonétique historique, Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur, 1979.  
 Bonnard, H. et Régnier, C. : Petite grammaire de l'ancien français, Paris, Magnard, 1989.  
 Fouché, P. : Phonétique historique du français, Paris, Klincksieck, 1952, 3 vol.  
 Fouché, P. : Morphologie historique du français, Paris, Klincksieck, 1967.  
 La Chaussée, F. de. : Initiation à la phonétique historique de l'ancien français, Paris, Klincksieck, 1974.  
 La Chaussée, F. de. : Initiation à la morphologie historique de l'ancien français, Paris, Klincksieck, 1977.  
 Lanly, A. : Morphologie historique des verbes français, Paris, Bordas, 1977.  
 Picoche, J. : Précis de morphologie historique du français, Paris, Nathan, 1979.  
 Pope, M. K. : From latin to Modern French, Manchester University Press, 1973.  
 Straka, G. : Les sons et les mots, Paris, Klincksieck, 1979.  
 Zinc, G. : Phonétique historique du français, Paris, P.U.F., 1991.  
 Zinc, G. : Morphologie du français médiéval, Paris, P.U.F., 1989.